

# 「有川捕鯨関連文化遺産」

# 長崎県新上五島町

有川の捕鯨は、紀州湯浅の技術者が有川湾に回遊する鯨を地元の者と共同で突取りをしたのが始まりと言われている。

有川湾の漁業は、藩制度の頃、「魚目（うおのめ）は海・有川は地方（じかた：農業）に勤むこと」という取り決めがあったことから、沖合で漁をするのは魚目に主導権があり、鯨が沖から回遊してくるものを積極的に捕っていたのも魚目だった。

当初、魚目と有川は同じ五島藩だったが、五島藩の藩主が亡くなった時に魚目は富江藩・有川は福江藩に別れてしまい、藩が変わったことで藩を分けた海境争いが激しくなっていった。当時の有川村名主である江口甚右衛門正利は、海境紛争の調停・有川捕鯨認可の為、四度江戸へ登り江戸幕府に直接訴えた。その結果、有川の村は一致団結して海を勝ち取ることが出来た。江戸に登る際に、「有川が飢えに苦しむからどうぞ勝訴させてください。」というお参りを鎌倉の弁天様をお願いしていたことから、勝訴したその帰りに鎌倉の弁財天に寄りて本尊（八臂弁財天像）を分霊してもらったものを弁財天宮として祀った。



捕鯨図

鯨見山は名前の通り鯨の様子を見ていた山で、正利はこの山に鯨供養碑を建てた。鯨供養碑は2つあり、鯨（オス）・鯨（メス）と刻まれており鯨の供養と鯨を捕ることで生活ができる有り難みを含めて祀っている。

正利は鯨組を創業し地元の人を全て雇い、捕鯨の技術や加工を学んだことが近代捕鯨の発展に繋がり、有川は近代捕鯨の転換期に主導権を握るようになる。

有川出身の原眞一氏が長崎で貿易会社を興し、国の政策となった捕鯨に力を入れ、それと相俟つ

て有川の人達を引入れるきっかけ作りを行ったことで転換期に有川が捕鯨の一大拠点となったのである。その功績をたたえ近代捕鯨の功労者として息子の万一郎氏（現ニッソイの前身の社長）ともども銅像が建てられている。

海童神社は、商業捕鯨時代の鯨の顎骨を祀って鳥居の代わりにした。海神様を祀った所で、海難事故防止を祈願し、お祭りとして芝居を奉納したところ海難事故がなくなったと言われ、その伝統は今も受け継がれている。



案内看板



- 鯨賓館ミュージアム：鯨の資料館 ☎0959-42-0180
- 五島うどんの里：うどん販売、うどん手延べ体験可 ☎0959-42-2655
- 弁財天祭り：弁財天宮のお祭り（毎年1月14日）
- 十七日祭り：海童神社のお祭り（毎年7月最終日曜日）